

ネイチャー高知

No 27 2006年 7月 28日発行

四万十川辺で見つかったマイヅルテンナンショウ

澤良木 庄一



マイヅルテンナンショウ (サトイモ科)

2006年5月15日 四万十川河川敷高茎草本群落内で撮影
(澤良木庄一)

平成18年5月、四万十川下流域の河川敷で、マイヅルテンナンショウ(単子葉植物、サトイモ科、テンナンショウ属)の群生が見つかった。

もともとマイヅルテンナンショウは、明治43年(1910年)5月上旬、山本一氏によって幡多郡角崎(現四万十市)で採集され、牧野富太郎博士によって確認発表(日本植物学雑誌 25、1911)された。その後は本種の存在に関する情報はなく、四国の植生と植物相を精力的に調査研究された山中二男博士の「高知県の植生と植物相」(1978)に於いても、「近年記録を見ない」との記述がなされている。高知県は、「高知県レッドデータブック」の編纂に当たり、県下の植物相調査を実施したのであるが、その際にも、本種の分布は確認されなかった。そのため、「高知県レッドデータブック、2000」の中では、絶滅種(EX)として記載されている。その後最近になって、高知県中部地区に於いて、本種の分布が2箇所、確認された。また、国土交通省中村河川国道事務所の所管する「四万十川水辺の国勢調査報告書」(2004)の中で、マイヅルテンナンショウの分布が報告されていた。

本年度(平成18年度)四万十川自然再生事業計画(中村河川国道事務所)に於いて、同種の分布域が工事区間内に含まれることとなり、区間内で希少種として既に報告されているミゾコウジュ、タコノアシ、ミズユキノシタ、マツカサスキ等とともに、マイヅルテンナンショウの確認とその対応を検討中のところ、県植物誌調査員(県西部担当田城松幸氏他)から同種の分布について報告があり、あらためて現地調査をした結果、マイヅルテンナンショウの分布が確認された。

今回確認されたマイヅルテンナンショウは、四万十川の旧河岸を含む河川敷のオギ、セイタカアワダチソウなどの高茎草本群落の中や、メダケ、マダケなどの密生する竹林のわずかな空間に分布している。またその個体数は、これまで全国で記録されている全個体数(約4,000個体、

環境省レッドデータブック、2000)をはるかに上回る個体数が確認された。また分布域は、概ね 19,000 m²ほどで、分布密度は高い。

マイヅルテンナンショウの和名の由来は、1枚の葉を構成する小葉13~21枚の展開した姿にあるとされている。これを牧野博士の古い図鑑(牧野日本植物図鑑、昭和15年版、北隆館、定価15円)の中から原文のまま引用すると、「和名舞鶴草は花高く描きて前方を指し、後方に開出せる小葉ありて其状宛も鶴飛翔の状あれば斯く云う」と。おわかりでしょうか。牧野博士は、はじめ「まいづるそう」と呼んでいた。

四万十川辺のマイヅルテンナンショウは、其の生育地が河川敷であり、洪水による冠水や流出など、極めて不安定な環境にある。また現地は河道内樹木管理区間にあり、防災上の対応が必要な箇所でもある。希少種の保護と防災上の河川管理とのバランスの上に、本種の保存が長く維持できるよう総合的な対策が求められている。

「環境省レッドデータブック 2000」から

マイヅルテンナンショウ *Arisaema heterophyllum*

形態と生育環境

低地の草原に生える多年草。高さ60-120cm。葉は1個で、鳥足状に17-21枚の小葉をつけ、小葉は狭倒卵形またはしばしば線形で、全縁。仏炎苞はふつつ緑色で一部紫色を帯びる。先は尾状にとがる。花期は5-6月。付属体は基部がやや太く、その上で前に曲がり、さらに上に向かって長く伸び、長さ20-30cm。

生育地の現状と判定理由

19メッシュのうち3メッシュで現状不明である。現存するのは2メッシュで数個体、11メッシュで数十個体、2メッシュで数百個体、1メッシュで数千個体であり、総計約4,000個体と推定される。平均減少率は約30%、100年後の絶滅確率は約20%である。植生の遷移、草地の開発、管理放棄が減少の主要因である。

都道府県別分布状況

秋田県、栃木県、千葉県、岡山県、山口県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県で生育が確認され、岩手県、宮城県、茨城県、東京都、徳島県では現状不明又は文献情報のみとなっている。

わたしのフィールドノートその3

地震・雷・ヘビ・飛行機



田城 光子

ひとには誰にも苦手なものがひとつやふたつはある。わたしなんぞは得意なものが何一つ無い代わりに、苦手なものがたくさんあって嫌になる。立派な人には苦手など無いはずだと思っていたら、やはり人の子、無いはずのものがあるのである。

故山中二男先生が幡多に調査にこられる時は、いつも義兄がそのお伴をさせていただいた。時には我が家に泊まっていられることもあった。お酒が好きだったから、そんな時は夜の更けるのも忘れて飲んだ。まだ三歳くらいだった娘が、「おんちゃん、おんちゃん」と、先生の日焼けした広いおでこをぽんぽんとたたいていたのを、なぜか今でも思い出す。

先生は大の飛行機嫌いで、そのため海外の調査には行ったことが無い、船も苦手だが、船に乗らなければ九州にも本州にも行けないのでグッと我慢して乗る。(その頃はまだ瀬戸大橋は架かっていなかった)ヘビが大嫌い、雷は怖い、でもお酒は大好き、と言った。なんだ、わたしとおんなじやいかと、大いに親近感をもったわたしは、たくさん飲ませて酔いつぶして聞き出そう、という魂胆はまったくなかったが、きさくに話してくれそうな気がして、その頃関心があったトサジヨウロウホトトギスのありかを教えて欲しいとお願いした。しかし「山中のおんちゃん」はただのおんちゃんではなく、立派な大学の先生であった。

「どんなに酔うてもこれは教えれん。自分で探せ」

といわれた。こうなったら自分で探し当てるしかない。先生は決して口を割らないときっぱりあきらめたわたしは、さっさと寝てしまった。その夜、階下の茶の間からはいつまでも義兄と先生の手拍子で歌う声が聞こえていた。

あれから三十年もたった。今わたしは、『山中目録』をリュックにしのばせて、先生の歩いた道をなぞっている。高度経済成長の中で、環境は大きく変わった。そして植生にも変化がおきた。山中目録に記載されている植物の中には、今では容易に確認できないものがある。逆にいままで高知県には自生しないとされていたものが、あらたに発見された例もある。絶えず変化する自然界にあって、完全な調査結果というものは出せないだろうし、次の世代に引き継いでいくしかないだろう。お酒ばかり飲んでないで、あの時もっと真剣に先生の教えを受けておけばよかったと、今になって思う。そうしておけば、もっと緻密な調査ができるのにとすると残念である。後悔とはさきにはたたないものなのだ。

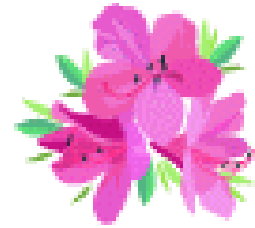
先生と同じように、わたしのヘビ嫌いも理屈ではない。遠く遙かな祖先より続いた遺伝情報の中に、しっかりと組み込まれていたらしく、とにかく嫌なのである。雷も、子供の頃叔母が落雷に打たれて死んで以来、ただ恐ろしくてたまらない。今、先生と山を歩いていたら、きっとヘビに出会うたびに悲鳴の合唱を繰り返し、ぴかっと光ればいちもくさんに山を駆け下り、それでも夜はおおいに気焔をあげて盃を傾け、植物談義に花をさかせたであろうと思うと、楽しくなってくる。

不思議なことに「山中のおんちゃんの広くて光るおでこ」が大好きだった娘は、なぜかこの頃ヘビに興味をもち、五歳になる息子といつも散歩する道でヘビを見つけては写真を撮ってきて、そのうち「塚地のヘビ図鑑」なるものをつくるのだと、はりきっている。いつか孫と散歩していたとき、ちいさな赤ちゃんヘビが目の前にニョロニョロと出てきて、走ってきた車に危うく轢かれそうになった。その時孫はそのヘビにむかって、

「ひとりでお散歩しては危ないよ。お父さんかお母さんと一緒に行きよ」と言った。ヘビの家族が揃って散歩している光景など、想像しただけで鳥肌がたつ。どうやらここらへんで、長く伝えられてきた遺伝情報はプツンとちょん切れたようである。



わたしのフィールドノートその4



拝啓 金柑たまたま 様

田城 光子

どうもひとつのことに凝ってしまう傾向がある。「テーマを持つ」といえば聞こえが良いが、みんなは「オタク」と呼ぶ。季節ごとにオタクの中味が変化する。去年から今年にかけては、ツツジオタクになった。

身近な場所で春早く紅紫色の花を咲かせるのは、フジツツジくらいしか知らなかった。ところが崖っぷちに、フジツツジよりも早く、花冠も大きく色も濃いツツジが咲いていたというのだ。第一発見者の名を借りて、*Rhododendron.Sakei*〔酒井さんの発見したツツジ〕と、学名もどきの名を付けて、仲間うちで呼んでいた。同じ頃、三原村でも良く似たツツジが見つかった。やはり清らかな流れを見下ろす崖の岩上である。双方の発見者はこのツツジはなんというツツジか、どんな葉が展開するか(まだ葉は出ていない)と議論を戦わせ、日本酒一本を賭けた。学名もどきもSake なら、賭けた品も酒と、のんべえの集まりを証明するようなものであった。軍配は三原側に上がり、春爛漫の中、満開の花を前に勝者も敗者も傍観者も、みんなでその酒を酌み交わした。

その名前はトサノミツバツツジ。少なくともこの頃は、この類のツツジは私たちの間では、トサノミツバツツジであった。

ツツジの仲間は、雄しべの数、子房や花系の毛の有無などで区別する。トサノミツバツツジの雄しべは10個、子房には腺状突起がある、とされている。花の後、枝先に三枚の葉を輪生する。しかし、今年になってどうも現物と図鑑がぴたりと一致しないことに気がついた。その上、高知県西部にはまだ未発表のものが自生する、という情報も入った。そこで、あまり標高の高くない谷川沿いの崖のある場所を、かたっぱしから歩いて、標本を集めることにした。

雄しべの数はほとんどが平均、8~9個。同一固体でも花によって違いがある。完全に10個そろっているものは全く無い。最も少ないものは5個であった。子房の色も緑色から赤。赤と緑のまだらなどもある。子房の腺状突起と毛には、あまり変化があるとは思えない。花冠の大きさの違ったものはあったが、おおかた小さめのほうであった。葉はこの時期には展開していないので、調べようが無い。集めながら、花冠の大きさ以外は違いが見抜けなかった。調査仲間同士で「植物はよく知れば知るほど、次第にわからなくなってくる」と感想をのべあうことがある。思えばトサノミツバツツジで祝杯をあげた頃が幸せだったと、誰もが言う。

どうせわたしをだますなら

だましつづけてほしかった

とは歌の文句であるが、騙されたことが分かった以上、女のプライドが許さない。騙したツツジも悪いけど、信じたわたしがバカなのよと開き直った。こうなったらとことん付き合うしかない。ふたたびあの美味しいお酒と一緒に、ゴクンとあなたの名前を気持ちよく飲み込むまでは。

採集したサンプルは、牧野植物園と、宮崎県でツツジの研究をしているM氏に送った。採集日のずれなどから、同一固体からのサンプルの提供はできなかったが、やはり全てについて、宮崎県で確認されているものによく似ていて、トサノミツバツツジとはすこし違うようだという返事が来た。高知県西部にはトサノミツバツツジは自生しないのかどうかはまだ不明であるが、このタイプのもものがほとんどであるということだけは確認できた。

後日、M氏から宮崎県産の金柑がお礼として送られてきた。太くて甘くてジューシーなその名も「たまたま」。生まれて初めて食べる大粒の金柑であった。昨年日本酒も美味しかったが。

まだお会いしたこともない研究者にサンプルが提供できたこと、それをたいへん喜んでくださったことを嬉しく思った。今まで分からなかった植物の名前がわかることはもちろん嬉しいが、志を同じくする人たちと情報交換ができ人間関係がひろがっていくことはもっと嬉しい。

ミチバタガラシ（道端芥子）

坂本 彰

ミチバタガラシは、例えば山と溪谷社の「山溪ハンディ図鑑野に咲く花」では “ 日当たりの悪い庭のすみや道端などに多い多年草。” とされており、ごく普通にあるはずの植物、いわゆる「路傍雑草」の一つなのですが、なぜか高知県では確認されていませんでした。※1 山中二男先生の「高知県の植生と植物相」（1978）でも、イヌガラシ属ではコイヌガラシ、イヌガラシ、スカシタゴボウの3種は記載されていますが、ミチバタガラシはありません。生育していないのではなく、「見落とされた種」との思いがあり、高知県植物誌調査に地域調査員として参加した2001年から注意して探してきました。ミチバタガラシの特徴は、イヌガラシに似ているが、花弁がないこと、果実がまっすぐなこと（イヌガラシの果実は薙刀のように少し湾曲している）ですが、これまで「これは？」と思ったものは、いずれもイヌガラシでした。

5年が経過した2006年春にも見つからず、「高知県では稀な植物ではないだろうか？」と、見落とし説が揺らぎかけていました。ところが、7月16日香美市（旧香北町）の調査で見つけることができました。場所は、香南市と香美市の境界の文代峠、最近地元のかたがたが「塩の道」として売り出し中の道沿いの畑のなかです。カラスビシャクやハナイバナなどの畑雑草の中に、イヌガラシに似ているがイヌガラシのように立ち上がらず、果実がピンピン横に張っている植物が眼に入りました。詳細に確認すると、花弁もなく、いずれもミチバタガラシの特徴を備えた植物でした。同行の調査員のYさんにも確認いただき、検索表とも突き合わせてミチバタガラシに間違いなしとの結論になりました。さらに周辺を調査すると、畑のほか道端にもたくさん生えていました。

話はまだ続きがあって、3日後（19日）の朝の通勤途上のことです。雨でしたので、通常の自転車ではなくバスで出勤しようとバス停に急いでいた時、自宅近くの路傍で「え！ミチバタガラシでは？」と思う植物を見かけました。植物誌調査のため遅刻する覚悟はできていませんでしたので、当日はそのままに出勤し、翌日朝早く確認しました。そうするとこれも間違いなくミチバタガラシでした。写真を写し、標本用に採集しながら「何で今まで見つけれなかっただろうか」と思いをめぐらすと、どうも探す時期を間違っていたのではないかと気が付きました。イヌガラシと同じく春の花のつもりで4 - 5月ごろ探し、今の時期にはすっかり対象から抜けていたようです。また、花弁がないということも見つけにくい要素で、ピンピン張った果実を目印にして探せば見つけることができているかもしれない。いずれにしても、数日前に文代峠で見えていたことが2番目に繋がったようです。さらに、昼休みの散歩コースの高知城でもそれらしい植物を見つけました。ただ、こちらのほうは花の時期を過ぎており、果実も確認できるような状況ではありませんので、結果は来年まで持ち越しになります。



ミチバタガラシ

2006年7月20日 高知市朝倉南町で撮影(坂本彰)

せば見つけることができているかもしれない。いずれにしても、数日前に文代峠で見えていたことが2番目に繋がったようです。さらに、昼休みの散歩コースの高知城でもそれらしい植物を見つけました。ただ、こちらのほうは花の時期を過ぎており、果実も確認できるような状況ではありませんので、結果は来年まで持ち越しになります。

高知城でも確認できれば「見落とし説」が証明できますので、来年が楽しみです。

※ 1 牧野植物園の話では最近寄贈された標本の中に、北川村で採集されたミチバタガラシがあるとのことです。

観 察 会 の お 知 ら せ

初秋の草原植物観察会のご案内

皿が峰の草原に一足早く訪れる秋の気配を感じ取ってみませんか。萩の仲間や秋の皿が峰を代表するホソバヒメトラノオのほか、スズサイコ、コキンバイザサ、イガクサといった希少種も観察できます。

日時 2006年9月3日 日曜日 午前9時から11時30分まで

場所 高知市高見町 皿が峰周辺
(9時に皿が峰登山口集合)

講師 稲垣典年さん

その他 少雨決行です。お天気が怪しいときは雨具をお忘れなく。

(参加希望の方は、事務局まで、電話、ファックス、E-mail でお知らせください。)

NACS-J **自然しらべ2006** に参加しませんか

NACS-J 自然しらべ 2006 は、夏休みに仮面ライダーを探せ!のテーマでバッタの仲間を調べます。対象となるバッタは、オンブバッタ、ショウリョウバッタ、ショウリョウバッタモドキ、トノサマバッタ、クルマバッタ、クルマバッタモドキ、カワラバッタの7種です。

詳しくお知りになりたい方は、

日本自然保護協会ホームページ (<http://www.nacsi.or.jp/event/ss2006/index.html>) または事務局までご連絡ください。

「ネイチャー高知」の原稿を募集します。「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、1月、7月の年2回発行しています。自然保護に関する主張やエッセイ、フィールドの紹介など何でも結構ですので、どしどし投稿ください。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

N026

事務局 780-8075 高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail akira@baobab.or.jp